



好々翁の顔容で宗匠帽をかぶり、旅のつれづれに句を詠む姿の芭蕉像（個人所蔵）

芭蕉の神格化した神名が「花之本桃青大神」で、「桃青」は俳号である。この神に祀った石碑は戸神山の中腹にある虚空蔵堂境内にある



（句の背景／源為義・義朝父子に仕えた齊藤実盛は、幼い木曾義仲の命を救ったが、年を経て平家方として義仲と戦い討たれる。恩人実盛の首に涙した義仲は、多太神社に実盛のかぶとを奉納した）
俳句の道を歩み50年になろうとする貝瀬久代さんは、地域の俳句教室

で講師を務め、俳句の魅力を広めています。芭蕉が義仲を偲ぶ心と、かぶとの下でコオロギも悲しみを思い鳴いている情景を表す中に、貝瀬さんは「いつの時代にも戦争はあり、この句が今世につながっているように」と、想像を膨らませます。
貝瀬さんは沼田市内の町田観音堂内に、同じ句が刻まれた句碑があることを知り、その場所を訪れる史跡巡りに参加。「沼田氏最後の主将平八郎景義が真田昌幸に謀殺されたとき、甲冑を埋めたと伝えられた塚の上に芭蕉の悲劇の句をしたためたと、ガイドから説明を受けました。詠まれたのは1689年頃で、句碑が建てられたのは1823年と約150年後。情報が届きづらい時代に、なぜ内容が合致した句が建てら



平等寺の芭蕉句碑。三角形で左側に銘文、右側に翁とあり、1893（明治26）年に芭蕉没後200年忌追慕として建てられた。県内三碑に入る名碑

八九間 空で雨ふる柳かな

それぞれの心模様を表現
心地よい秋風を感じられる9月下旬。貝瀬さんと俳句会「桔梗」に所属するメンバーが、武具塚の前で句を詠みました。〈秋麗や武具塚に観る芭蕉の句／貝瀬久代〉〈武具塚の円し色なき風の中／真下章子〉〈芭蕉句碑のうする文字や赤とんぼ／白井幸四郎〉
同じ風景を見て同じ史実を知っても、感じ方や表現は十人十色で、さまざま情景が広がります。俳句は一人でできる手軽さがある一方、人数が集まれば世界が広がり、自分の思いも共感してもらえ心の交感ができ



ます。貝瀬さんは「芭蕉のように情景を正確に伝える表現の力を磨き続け、地域と人をつなぐ俳句の魅力を発信していきます」と、話します。



栄町十二山神社境内。中央に草書体で大きく「芭蕉翁」と刻まれる。「華王」はサクラの意。昔、この地にサクラの大きな木があり名所だった

春の夜は 華王に明てしまいきり